

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

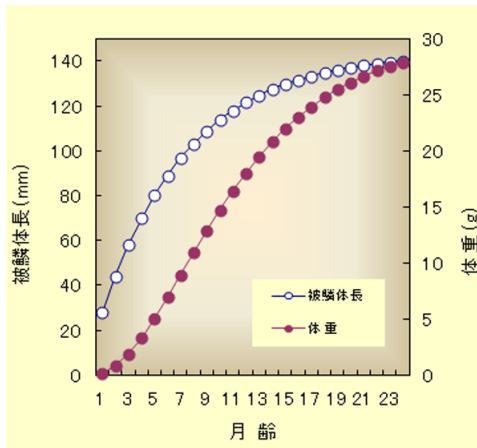
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 3年
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 厳冬期を除く周年にわたり産卵する
索餌期・索餌場: 分布域のほぼ全域
食性: カイアシ類を中心とした動物プランクトン
仔稚魚期は動物プランクトンやマアジ・マサバなどの魚類、未成魚・
捕食者: 成魚期は魚類の他に、クジラやイルカなどの海産ほ乳類や海鳥類など

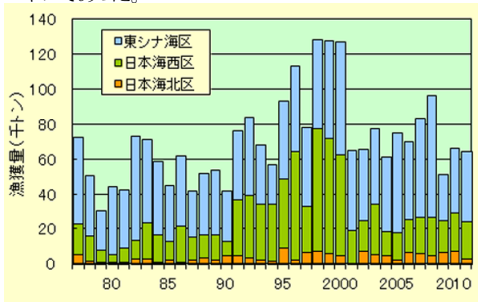


漁業の特徴

本資源は、日本海北区(石川県～新潟県)では主に定置網により漁獲され、日本海西区(山口県～福井県)では主に大中型まき網・中型まき網・定置網などにより漁獲されている。東シナ海区(福岡県から鹿児島県)では、主に中型まき網により漁獲される。なお、シラスは熊本県や鹿児島県の沿岸域で主に漁獲されている。

漁獲の動向

1990年代後半、シラスを含めずに10万トン超の漁獲があったが、2004年に6.1万トンまで減少した。その後、5～10万トンの間で増減を繰り返し、2011年は6.4万トンであった。シラスの漁獲量は、2000年には1万トンを超える漁獲があったが、その後急減した。2005年前後には再び1万トン近い漁獲があったが、2007年以降は減少し、2011年は0.47万トンであった。



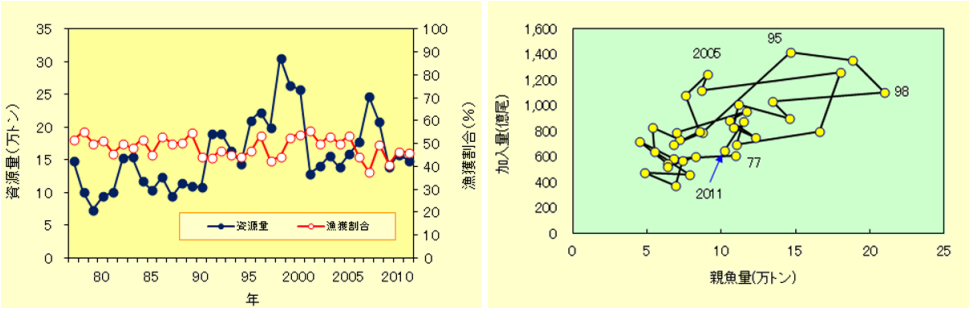
資源評価法

年別年齢別漁獲尾数に基づくコホート解析により、資源量を推定した。産卵調査、計量魚探調査および新規加入量調査(ニューストーンネット)などの結果を参考とした。

資源状態

コホート解析から推定される資源量は、1990年代まで徐々に増加した。1998年には30.6万トンに達したが、2001年には12.9万トンまで減少した。その後、2007年まで増加傾向を示したが、2008・2009年は減少した。2010年(15.8万トン)と2011年(14.9万トン)は2009年(14万トン)とほぼ同レベルであった。また2011年の親魚量は10.2万トンであり、再生産関係から求められるBlimit(親魚量9.1万トン)を超えている。過去3年の資源量は安定しているものの、2008年以降の直近5年間は減少傾向にあると推定された。そのため、資源水準は中位で、動向は減少と判断した。





管理方策

再生産関係から、再生産成功率(RPS)と加入量の上位10%の交点をBlimitとした(親魚量9.1万トン)。現状の親魚量(10.2万トン)はBlimitを上回っている。2012年以降の加入量を過去10年間の中央値のRPSと仮定したときに、現状のFで資源はほぼ維持されると見込まれるため、ABC算定のためのFの基準値はFt(=F2011)を採用した。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	58千トン	F2011	1.43	46%
ABCtarget	52千トン	0.8F2011	1.15	41%

- Fは各年齢の平均
- ただしシラスの漁獲量を含む

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源量は1990年代後半以降に変動を繰り返しており、近年では2007年に高い値を示した後、2009年まで減少したが、2011年は2009年および2010年とほぼ同じ水準であった
- 資源水準は中位で、動向は減少

管理方策のまとめ

- 再生産成功率が過去10年間の中央値であれば、現状の漁獲圧で資源はほぼ維持される
- 資源を安定して利用するためには、親魚量の確保が有効であり、加入が少ないと判断された場合には、0歳魚を獲り控えるなどが効果的

執筆者: 黒田啓行・大下誠二・安田十也

資源評価は毎年更新されます。